

令和 6 年 度

千 早 赤 阪 村 立 学 校

評 価 報 告 書

学 校 名 (赤 阪 小 学 校)

校 長 名 (蔦 亜 紀 朗)

Ⅰ. 教育目標

「のびのび ～社会を生き抜く、確かな学力作り～」

「いきいき ～豊かな心、たくましい人づくり～」

「しっかり ～魅力ある教育環境づくり～」

千早赤阪村教育大綱(第2期)・令和 6 年度 千早赤阪村教育方針より

本校のキャッチフレーズ

「一人ひとりが輝く元気な学校
ふるさと 赤阪小学校」

めざす子ども像

「強く」・「正しく」・「朗らかに」

元気な子 考える子 やさしい子 根気よく取り組む子

手伝う子 工夫して学ぶ子

2. 経営方針

1 のびのび ～社会を生き抜く、確かな学力づくり～

『生活科・総合的な学習の時間の教育計画と連動したカリキュラム・マネジメント』

- ◇基礎的な知識・技能の獲得があってこそその思考・判断・表現力の育成。基礎・基本の学びをねばり強く続け、望ましい学習・生活習慣の定着をめざす。ユニバーサルデザイン【UD】に基づく「授業づくり」で、支援教育の推進も含めすべての子どもが学びやすい赤阪小学校をめざす。
- ◇目的意識や必然性を大事にし、児童が知識・技能を生かし、思考・判断・表現する授業づくり。考えを書いたり話したりするなどして明確に表現できる力を児童につける。
- ◇生きて働く力を、有用感をもって生活に生かせる場づくりとして、行事や特別活動等を工夫。
- ◇学年合同授業の増加など、少人数、小規模のメリットを生かした教育活動を展開。

2 いきいき ～豊かな心、たくましい人づくり～

『学校教育・学校生活全般で自ら思考・判断・表現する児童の育成』

- ◇相手意識をもって考え、自分の言葉で発信できる学習、体験の場の充実。

『相手意識をもち、多様性を理解しながら社会の中で自分らしく生きるための力の育成』

- ◇協働的な学びのある授業と学校行事・生活を結びつける、カリキュラム・マネジメントの推進。
- ◇集団や社会で課題を乗り越え、ともにより良く生きていくために、一定の規範を大事にしながらか人権を尊重し合って協力し、相手を思いやる気持ちを育てる。

『ねばり強さやたくましさに価値を見出す児童の育成』

- ◇運動会やかけ足運動といった行事を通して身につける体力的な強さだけでなく、何ごとにも本気で全力で取り組む姿勢を大切にする。運動以外の達成課題に対してもポジティブにとらえ、乗り越えて自信をつけ、成長しようという気持ちを育てる。

『相手意識をもち、多様性を理解しながら社会の中で自分らしく生きるための力の育成』

- ◇日々の授業と学校行事・学校生活とを結びつけるカリキュラム・マネジメントの推進。

3 しっかり ～魅力ある教育環境づくり～

『子どもたちにとって安全・安心な学校づくりを進める教職員組織づくり』

- ◇子どもたちのことをより丁寧に考え組織的に対応できるように、教職員が心の余裕をもって働けるゆとりも作るため、教育活動や業務の精選を行う。その目的や意図について理解を得られるよう積極的に発信する。保護者・地域と双方向性のあるコミュニケーションを大事にしながら、人と人とのつながりが子どもたちの安心感を生む「朗らかな」学校に。

『「地域学校協働活動」の推進』

- ◇「子ども育みボランティア」の活動についてより一層の支援をお願いし、地域のもつ温かく大きな力を本校教育に生かせるよう、組織体制を整えることをめざす。
- ◇郷土である大阪府唯一の村、千早赤阪村に愛着と誇りをもち子どもたちを育てるために、歴史学習、自然、名所、旧跡に親しむなど郷土を題材にした学習を積極的に行う。

3. 本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

		I 社会を生き抜く、確かな学力づくり
P	重点目標	(1) 学習習慣の定着と言語能力の育成 ※()数字は村教育方針の項目番号 ①基礎的な知識・技能の獲得のため、こつこつと取り組む学習・生活経験の積み上げを図る。 ②児童のやりがい、目的意識がある学習活動で、知識・技能を生かして思考・判断・表現する授業づくりに取り組む。 (2) 外国語教育と異文化理解 ①必然性のある活用場面があり、指導と評価が一体化した、担任主導での授業を実践する。また、日常での活用機会も設け、使える英語をめざす。 ②教員研修は、日常のミニ研修を続けるとともに、外部講師を招聘する機会は精選しながら、事前計画をしっかりと立てることで効果・効率を上げる。 (4) 支援教育 ①ユニバーサルデザイン【UD】に基づく「授業づくり」と「学校環境整備」「学校体制・組織づくり」をめざす。 ②支援学級教室における合同の自立活動の場の設定を工夫したり、支援教育と通級指導の橋渡しを大事にしたりしながら、児童にとって必要で効果的な支援教育を進める。 ③支援教育コーディネーターを要にし、校内、そして対外的にも組織的な対応を進める。
D	具体的な取り組み内容	(1) ①②読解力ドリルの継続使用。活用テスト（学校独自テスト）実施と分析。学期ごとと学年別の国語科・算数科での「成果と課題」の整理と「次の学期方針」の共有・掲示。総合的な学習の時間や生活科での体験・気づき・探究学習。 (2) ①②2年の研究授業。オーストラリアとのWEB交流。朝の職員打合せ時の「クラスルームイングリッシュ ミニ実技研修」実施等。ラーチャレ・ランチタイム交流。 (4) ①②③学年教室の環境整備。千早小吹台小なかよし学級との交流。商業施設での社会体験や歩く運動を入れた校外学習。体育館での体を使った自立活動。校内支援委員会実施。支援教育・通級指導に関する研修実施。
C	自己評価／成果と課題	(1) ①②読解力ドリルを使っでの学習継続は一定の効果あり。活用テスト（独自テスト）の実施と分析を基に、学期ごとに学年別に整理している国語科・算数科での「成果と課題」「次の学期方針」は、共有・掲示したことで意識化できている。総合的な学習の時間や生活科で、体験・気づき・探究のある活動を大事にしてきた。 (2) ①②2年外国語活動研究授業では、児童が意欲的にクイズづくりに取り組んだ。オーストラリアとのWEB交流では、事前にあいづち・やり取りを意識化。朝のミニ教員研修では、クラスルームイングリッシュ、特に教員が児童にかけ一声（ポジティブな評価や確認など）を学んで活用。6年生グループでのALTとの英語給食が定着。 (4) ①②③「校内支援委員会」にスクールカウンセラーも出席する形を1回設定、いろいろな示唆を得た。支援教育・通級指導に関する校内研修を2月に実施。学年教室のUD環境整備以外に、千早小吹台小なかよし学級との交流、商業施設での社会体験や歩く運動、体育館で体を使った自立活動、校内支援委員会の定期開催面が充実していた。
A	次年度に向けて	(1) ①②府の「確かな学びをはぐくむ学校づくり推進」事業を活用し、新たな学力向上の取り組みを進めていく。 (2) ①②村立小学校としては、学年担任がALTとともに外国語科・外国語活動の授業を行う方針であるので、次年度も研修を継続し、研修内容を改善しながら進めていく。 (4) ①②③校内支援委員会の内容を、全職員でできるだけ早く共有する機会を持てるとよい。校外学習・交流は、可能な範囲で継続する。支援教育・通級指導に関する研修は隔年で外部講師を招聘しているので、次年度は実施を計画したい。

3. 本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

		Ⅱ 豊かな心、たくましい人づくり
P	重点目標	(1) キャリア教育・(3) 人権教育 ※() 数字は村教育方針の項目番号 ①生きて働く力を、有用感をもって生活に生かせる場づくりとして、行事や特別活動の内容や進め方を工夫する。 ②集団や社会で課題を乗り越え、ともにより良く生きていくために、一定の規範を大事にしながら人権を尊重し合って協力し、相手を思いやる気持ちを育てる。 (4) 体力運動能力・(5) 食育 ①少人数・小規模のメリットを生かした教育活動として、「合同体育」を中心にした学年合同授業を多く取り入れ、運動経験のバリエーションを増やす。 ②運動会やかけ足運動といった行事を通して身につける体力的な強さだけでなく、何ごとにも本気で全力で取り組む姿勢を大切にする。 ③運動以外の達成課題に対してもポジティブにとらえ、乗り越えて自信をつけ、成長しようという気持ちを育てる。心身の健康保持・成長のため食育を推進。 (6) 郷土学 ①「千早赤阪村郷土学習プログラム」 学校側から地域へ発信、出向く機会を増やし、郷土の魅力に触れ、千早赤阪村を愛し誇りに思う気持ちを育てる。
D	具体的な取り組み内容	(1)・(3) ①②学級での仲間づくり、わんぱく班活動（運動会やかけ足記録会での活用含む）、委員会活動、道徳・人権教育、法務局・村人権擁護委員さんとの人権の花運動・人権教室実施（3年ごと）、戦争体験者の方を招聘しての全校平和学習。 (4)・(5) ①②③合同体育、なわとびタイム、赤阪っ子げんきアップ習慣、給食時指導・食育授業。 (6) ①6年の郷土学フィールドワーク、6年の総合的な学習の時間の取り組み、1・2年の昔遊び交流、ボランティア「かりん」の読み聞かせ・校庭開放企画、3・4・6年の陶芸クラブくすのきの交流、2・3年の校区・村探検、5年の森林環境学習。
C	自己評価／成果と課題	(1)・(3) ①②児童アンケート（5・6年生対象）「大人になったときの職業（仕事）」について考えることがある」の肯定的回答が他の項目と比べ少ない傾向が続いている。全校平和学習は児童の発達段階を考慮し、1～3年は前半のみの2部構成とし、より細やかな内容で実施できた。わんぱく班活動の評価は、職員だけでなく、児童・保護者・学校評議員いずれからも高い。 (4)・(5) ①②③低・中・高学年での合同体育は、ボール運動や鬼遊びが特に有効。かけ足運動・記録会、げんきアップ習慣、給食時指導・食育は定着。なわとびタイムは、昼休みのチャレンジ企画に変更。児童の目標達成意識が高かった。 (6) ①交流・校外学習は昨年度より機会が充実した。ボランティア「かりん」による校庭開放イベントは昨年度より1回多く実施できた。陶芸クラブくすのきの交流機会が増えた。
A	次年度に向けて	(1)・(3) ①②村事業の「キッズニア甲子園EAP」のより効果的な活用や、その他キャリア教育実践の工夫を考える。 (4)・(5) ①②③合同体育の継続が時間割上で可能か年度末に検討。今年度、なわとびタイムは今年度をスリム化したが、次年度の位置づけは再検討（<u>年度内に検討予定</u>）。 (6) ①地理的歴史的な面での郷土の魅力だけでなく、人とかかわりて郷土の魅力を実感できたので、交流とフィールドワーク（校外学習）の両輪で今後も進めていきたい。

3. 本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

Ⅲ 魅力ある教育環境づくり（3-1 安心安全な学校づくりの推進）		
P	重点目標	（1）いじめ・虐待防止・不登校対策他 ※（ ）数字は村教育方針の項目番号 ①いじめ・不登校等の対応については、未然防止や早期対応、そしてケースによっては、ねばり強い対応に努める。必ず関係者会議で方向性を決め、体制を作って組織的に動く。 ②子どもたちのことを丁寧に、また多面的に理解し、保護者・地域と双方向性のあるコミュニケーションを大事にすることで、子どもたちの安心感を生む「朗らかな」学校づくりを進める。 （2）安全教育・（3）防災教育 ①交通安全も含めた学校安全計画をもとに、安全教育を全校的に進める。 ②「学校教育・学校生活全般で自ら思考・判断・表現する児童の育成」のため、避難訓練などの学校行事の設定を工夫して効果を上げる。 ③昨年度「学校防災アドバイザー」から助言を受けたことを今年度の取り組みの中で実践して改善を図る。
D	具体的な取り組み内容	（1）①②「こころとからだ、くらしのアンケート」は、ほぼ月1回実施。いじめ・不登校に関する対応委員会を、定期及び状況により臨時に開催（SSW とも連携）。朝の打合せ時も含め日常的に情報共有。村スクールカウンセラーを講師とした研修を実施。 （2）・（3）①②③赤阪駐在所の協力で交通安全教室を実施。防犯教室（いかのおすしグッズ贈呈・府警警察音楽隊公演）も実施。不審者侵入対応訓練、地震・火災避難訓練は学校独自で実施。避難訓練は、設定を例年と変え、「思考・判断する」要素も導入。「学校防災アドバイザー」は2学期の地区別児童会の折にご来校。児童の話し合いの様子、校舎内外の環境、昨年度いただいたご助言により改善したところをご覧いただいた。
C	自己評価／成果と課題	（1）①②村スクールカウンセラーを講師とした研修「子どもたちの SOS を受け止めるために」を夏季に実施。具体的なケースを想定例として、学校として・担当職員としての対応、留意点を理解。いじめ・不登校事例に関し、関係者との情報共有や連携、保護者・地域との双方向性のあるコミュニケーションについては、意識してうまくいった点もあれば対応が遅れたケースもあった。反省点をふまえ、初期段階で組織的に共有することを年度後半は大事にしてきた。 （2）・（3）①②③避難訓練は、発生現場や状況を変えて実施していくことで、大枠の思考・行動パターンは守って対応しつつ、ケースバイケースの部分について考えるきっかけを作ることができた。昨年度、高いところや不安定なところに置いてある物の固定や移設など、「学校防災アドバイザー」から助言いただいたことを学校側で環境改善していた点について、評価していただけた。地区別児童会・集団下校後に講評・質疑応答の形で職員研修を実施した。
A	次年度に向けて	（1）①②いじめ・不登校等の対応について、家庭支援の点からも福祉面でのサポートや連携について意識していくことを今年度途中から共有しているので、次年度も SSW との関係性を大事にしたい。校内での情報共有については、できるだけ対応方針まで共有できるよう心がける。 （2）・（3）①②③実際に役立つよう、安全教育・避難訓練においても引き続き、「学校教育・学校生活全般で自ら思考・判断・表現する児童の育成」の観点は大事にしていきたい。児童だけでなく職員も、実際の避難にあたっては、児童のフォローと、それ以外に例えば現場対応などを、状況に合わせて分担する動きを取るよう確認している。

3. 本年度の重点目標、具体的な取り組み内容、自己評価、次年度に向けての改善策

Ⅲ 魅力ある教育環境づくり（3-2 学校および教職員の資質向上）		
P	重点目標	(2) 教職員研修の充実 ※()数字は村教育方針の項目番号 ①村教委による研修、校内研修を通して、授業力・教員力の向上を図る。 (3) 働き方改革 ①教職員体制・教職員数が今年度激変したことを受け、子どもたちのことをより丁寧に考え、より深く連携して対応できるよう、放課後の事務や打合せ時間の確保等、教職員が心の余裕をもって働けるゆとりをつくる。変更や廃止にも踏み込んで働き方改革を進める。 (4) 地域学校協働活動 ①「子ども育みボランティア」活動を充実させ、学校と地域が協働して学校教育における課題に取り組む体制づくりを整え、地域の力を本校教育に生かす取り組みを進める。
D	具体的な取り組み内容	(2) ①村教委計画・実施の「村教職員研修・会議」の年間計画により、研修・担当者会議にそれぞれ出席。他に学校独自で、なわとびの実技研修、給食センターと連携したアレルギー対応実技研修、大学教員を講師に招いての「性の多様性を包摂する国語科教育」をテーマとする授業づくり・児童理解研修などを実施。 (3) ①週1回そうじなしデー〔1学期〕、週2回の短縮校時・ミニそうじデー〔2学期以降〕を設定し、正規の勤務時間の終了時刻までの放課後時間帯を少し長めに確保。事務や会議等に充当。 (4) ①村老人クラブ連合会と低学年との昔遊び交流 陶芸クラブくすのきの作陶体験交流、ボランティア「かりん」の読み聞かせ、別途企画の校庭開放に合わせた遊び交流（「おおさか元気広場」放課後の居場所づくり）。
C	自己評価／成果と課題	(2) ①担当者会議では、村内他2校との情報交換もしながら、村教委提供の情報を参考にできた。村教委からは会議概要を整理した資料が届くので、校内共有用に活用できた。学校独自の研修企画は、主に夏季休業中に実施。職員からの希望をもとにして内容を決めているので、一定のニーズに応えることができている。 (3) ①今年度は教員数減の影響が大きく、学年担任の持ち時間が増えたり、各教職員の担当する業務も増えたりした。子どもたちへの教育のため、学校全体・個々の教員がすべきことを大きなビジョンとして整理するのが本来であることは理解しつつ、時間の捻出という物理面に絞って対応した。また、そうじ機会を減らしたことや教職員の余裕が減ったことも影響したか、学校をきれいにするための提言が保護者・学校評議員からあった。 (4) ①作陶体験では、昨年度に続き3・4年生、加えて今年度は6年生も卒業制作として焼き物を作ることにし、授業支援を通して交流させていただいた。村社会福祉協議会のサポートありがたい。読み聞かせは、今年度4～6年は授業時間内ではなく昼休みに開催してみた。地域学校協働活動の事務局は主に学校が担い、各団体の代表の方と調整を行っている。この事務局運営にも、地域の方のお力添えをいただけるのが理想的。
A	次年度に向けて	(2) ①研修機会の充実。学校の取り組み公開。教職員アンケート結果で例年課題として出る、「研修成果を紹介したり共有したりする機会」を作りにくいという現状を変えていけないか、考える。 (3) ①そうじも大事であるという方針で、<u>次年度は毎日10分間のそうじ時間を固定する方向で検討中</u>。現在の「日課表（1日の校時・下校時刻）」自体の変更も計画。4月当初からの実施だと周知に時間の余裕がないため、5月以降の導入を想定している。 (4) ①読み聞かせの機会の持ち方、時間設定について、協議していく。「子ども育みボランティア（地域学校協働本部）」の事務局運営についての地域協力依頼ができるか探していきたい。

		V 予備（各校独自の重点項目があれば記載）
P	重点目標	令和6（2024）年度は設定しない。
D	具体的な取り組み内容	
C	自己評価／成果と課題	
A	次年度に向けて	

4. 教育自己評価

【教職員による評価（1月実施）】

R6(2024) 教職員アンケート集計表		プラス評価	マイナス評価
	項 目	A+B	C+D
1	この学校の教育課題について、教職員で日常的によく話し合っている。	90%	10%
2	各年度の教育計画の作成に当たって、教職員でよく話しあっている。	90%	10%
3	この学校の教育活動には、他の学校にない特色がある。	90%	10%
4	様々な問題行動の防止のための早期指導に学校全体で心がけている。	80%	20%
5	教育活動全般にわたって評価を行い、次年度の計画に生かしている。	80%	20%
6	いじめ・不登校などの問題がおきた時、組織的に対応できる体制が整っている。	70%	30%
7	新学習指導要領実施、新しい教育課題への対応について積極的に研修を実施している。	90%	10%
8	各教科の指導内容について、基礎・基本を明確にし、教材、教具の工夫を行っている。	90%	10%
9	各教科等の授業において、ICT機器の特性を生かして活用している。	100%	0%
10	教科横断的で総合的な学習に取り組んでいる。	100%	0%
11	思考力を重視した問題解決的な学習指導を行っている。	100%	0%
12	学校行事について児童にとって魅力あるものとするために、工夫・改善を行っている。	100%	0%
13	課題別・習熟度別学習やTTによる学習指導等、個に応じた学習形態の工夫・改善を行っている。	100%	0%
14	学習が遅れがちな児童への対策を、全校的課題として取り組んでいる。	80%	20%
15	学習意欲の高い児童に対する学習指導を、個に応じた視点で工夫して行っている。	70%	30%
16	学校運営に校長のリーダーシップが発揮されている。	90%	10%
17	校長は、教職員一人ひとりが意欲的に学校経営に参画できるようにしている。	100%	0%
18	児童のキャリア教育に学校全体で取り組んでいる。	80%	20%
19	人権問題を正しく理解し、差別や偏見のない社会をめざす主体的な生き方につながる学習となるよう工夫している。	90%	10%
20	障がい理解を深め、ユニバーサルデザインの理念に基づく社会を築く資質を養うことができるよう工夫している。	80%	20%
21	体罰やハラスメントの防止をはじめ、人権尊重の姿勢にもとづいた生徒指導が行われている。	100%	0%
22	この学校では、各分掌や各学年間の連携が円滑に行われ、有機的に機能している。	80%	20%
23	職員会議をはじめ各種会議が、学校運営に生かされている。	100%	0%
24	日々の教育活動における問題意識や悩みについて、気軽に相談しあえるような職場の人間関係ができています。	100%	0%
25	事故、事件、災害等に対して迅速かつ適切な対処ができるよう、役割分担が明確化されている。	90%	10%
26	施設・設備について日常的に点検や管理が行われている。	100%	0%
27	子どもたちの安全教育・安全管理を学校として計画的に行っている。	100%	0%
28	校内研修は、教育実践に役立つような内容となっている。	100%	0%
29	研修・研究に参加した成果を、他の教職員に伝える機会が設けられている。	60%	40%
30	学校内で他の教員の授業を見学する機会がよくある。	60%	40%
31	個人情報保護の観点から、児童の個人情報に関する管理システムが確立している。	90%	10%
32	中学校などとの校種間連携の機会を設け、教育活動全般に生かしている。	80%	20%
33	生活指導において、家庭や関係諸機関との緊密な連携ができています。	100%	0%

保護者アンケート（１月実施）の集計結果より

【アンケート結果より】（アンケート回収率は78%でした）

昨年度も書きましたように、対象の保護者の方が年度ごとに入れ替わっていきますので昨年度との単純比較が正確な考察とはいえませんが、③の「学校は、特色のある教育活動を行っている。」、⑩の「学校では子供の人権を尊重する教育活動が行われている。」、⑭の「体力向上・運動への関心を高める取り組み」については、昨年度よりプラス評価が比較的増えた項目です。昨年度と比べマイナス評価が目立って増えた項目はありませんでした。

「保護者・地域の願い」というのはいろいろなものがあると思いますので、これからもいただいたご意見は参考にさせていただきます。子ども一人ひとりに応じた指導・支援につきましては、ここ数年ニーズが高い回答傾向です。次年度の教職員体制で対応できることを考えてまいります。

児童アンケート結果同様、プラス評価が多くてもAの割合が減りBの割合が増えたものもあります。調査対象数が限られているので、経年変化にばらつきが出てあまり細かい分析はそぐわない面はありますが、その結果も参考にはしております。

5. 学校関係者評価

学校評議員会（第1・2回は書面で意見集約。第3回は集合型開催。欠席の場合は書面で提言。）

【意見の要約】

■少人数小規模の個に応じたていねいな指導、異年齢との探究的な学び、大規模校ではできない経験や学習が村の学校のよさ、そんな村のよさを先生方も保護者も子供たちも実感しながら多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるべくたくましく育て欲しいと願う。

■小規模校の強みは、異年齢での活動・学校間交流がしやすいこと。この強みを生かそうと、異学年による学びから異学年による学習、学校間での取り組みや学習なども戦略的に取り組んでいる。保護者も認めているところがいい。

■異年齢活動は赤阪小の強み。続けてほしい。

■児童アンケート、保護者記述意見でも、村の食育のすばらしさが認知されてきており喜ばしい。

■教職員がよく話し合っていて熱心に研修し、ICTも活用して個に応じた学習の工夫改善をおこなっている。研究会に参加した成果の共有の機会やお互いの授業見学の機会、中学校との連携については肯定的な数字が低い、この部分を充実には先生側に時間が必要。

■一人ひとりに応じた学習指導や支援については、アンケート結果では「できることがまだある。」ということなのかもしれない。

■保護者アンケートで肯定的評価が他の項目より低いのは⑥「学習のつまづきを把握し、一人ひとりの子供に応じた指導や支援をしている」だが、もちろん学校は一人ひとりの子どもの学習状況を把握した上で個別最適な学びの実現に努力していることと思う。現行の学習指導要領にある「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実は、次期改訂に向けても文科省が強調していることでもあり、ICTも活用してこの研究を進めていくことが大切だと思う。

■これからの学校は一人ひとりの児童が自分のよさや可能性を認識するとともにあらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようになることが求められている。何を合体させて時間をつくるのかなど、カリキュラム・マネジメントの視点からも考えてみるとよい。

■学校生活が楽しく充実していると感じている児童が多いことがうかがえる。児童アンケート⑥「自分が努力していることを認めてくれる」の肯定的評価が100%という結果がすばらしい。子どもたちのこんな気持ちに応えて、引き続きすばらしい学校にしていってほしい。

■当たり前だと思っていたことがこれから変化し、形を変えていくこともあるのだろうと思う。教員はそんな世の中の流れにもアンテナを張っておくことは大切ではないか。

■学習指導要領の理念をしっかりと浸透させ、しっかりと実現していくことはとても大切なことで、近道でもあり、改めて学習指導要領の大切さを実感している。

■ボランティア活動（子ども育みボランティア）での学校・地域連携は、千早小吹台小が活発な印象。赤阪小でも続けていく方向ということなので、啓発・協力依頼が進むと良い。

■校区に広い公園がないので、校庭開放は機会が増えると良いと思う。学童がある千早小吹台小と環境が異なることや防犯面など事情があるのも理解しつつ。

■タブレット端末の活用などデジタルな学習が進んでいるが、視力への影響など良さも課題もある。紙の活用も大事にしてほしい。

6. 第三者評価

未実施